

# 飛翔する《笛吹き童子》 芸能神義経の誕生

中村 一基

はじめに

義経と弁慶の五条大橋での対決場面に相当するほどの、わくわくする対決場面が他にあるだろうか。千本の太刀を集めることを目標として、京の町を徘徊する僧兵姿の弁慶が、五条大橋で千本目に当たる黄金の太刀を帯びた女装の笛吹き童子牛若丸に遭遇、太刀をめぐって闘いを行ない、牛若丸の圧倒的な強さの前に降り、主従の約束をするという、《義経伝説》の中でも最も親しまれた場面である。現在、この場面を描いた多くの絵（挿絵・浮世絵が大半）が残っているが、七つ道具を背負った弁慶の大薙刀が振り下るされ、牛若丸が軽やかに飛翔してそれをかわしている構図が、その絵の定番の構図である。本稿では、飛翔する《笛吹き童子》に象徴される芸能神義経誕生の神話にこだわってみたい。

## 一、「ゆらりと」という描写

『義経記』では、二人の対決の場面は五条大橋ではなく、五条天神ではあったが、「義経の）ゑいやと言ふ声の内に、九尺ばかりありける築地にゆらりと飛び上がり給ふ。」（『義経記』「弁慶洛

中にて人の太刀を奪ひ取る事」とその飛翔は共通している。義経の飛翔が、自在であったことを「ゆらりと」という形容が示している。「築地よりゆらりととびおり給へば、弁慶太刀打ちふりてづと寄る。九尺の築地よりおり給ひしが、下に三尺ばかり落ちつかで、又取つて返し上にゆらりと飛び返り給ふ。」（同）と弁慶を揶揄しながらの余裕の飛翔である。そして、この飛翔が少童神としての牛若丸を証明する。この「ゆらりと」という表記は、壇ノ浦の闘いにおいて能登守教経に追い詰められた義経が九死を脱する場面、俗に《八艘跳び》の場面において初めて登場している。「判官かなはじと思はれけん、長刀脇にかいはさみ、みかたの舟の二丈ばかりのいたりけるに、ゆらりととび乗り給ひぬ。」（『平家物語』巻第十一「能登殿最期」）。この武將義経の得意技の前に、「能登殿ははやわざやおとられたりけん、やがてつづいてもとび給はず。」（同）と能登守は追うことができなかつた。だから、《八艘跳び》は必要なかつた。だが、義経の飛翔は強調された。義経は蝶のように軽やかに飛べねばならない。この飛翔は「僧正が谷にて、天狗と夜々兵法をならふと云々。されば早足・飛越、人間のわざとは覚えす。」（古活字本『平治物語』巻下「牛若奥州下りの事」と、軍記物語のなかで、牛若丸の時代、天狗にならつた兵法の成果と

して認知されていた。すでに、飛翔する童子神としての義経伝説は『義経記』成立以前に始まっていた。

## 二、天狗と『六韜』

『義経記』において、新たに、その飛翔性を濃厚にする兵法の書が加わる。それが、天皇の秘蔵したとされる中国渡来の兵法書『六韜』であった。その『六韜』獲得をめぐるエピソードが、『義経記』巻第二「義経鬼一法眼が所へ御出の事」である。その兵法書を学ばば「異朝には太公望これを読み、八尺の壁に上り、天に上る徳を得たり。張良は一卷の書と名づけ、是を読み、三尺の竹にのほりて、虚空を翔ける。」とある。「天に上る」虚空を翔けるは飛翔を可能にするということである。そして、弁慶との闘いの場面での、牛若の飛翔がこの『六韜』を読んだ結果であることが「九郎御曹司は六韜を読み、九尺の築地を一飛びの中に宙より飛び返り給ふ。」(『義経記』巻第三「弁慶洛中にて人の太刀を奪ひ取る事」と記された。確認しよう。天皇の秘蔵した『六韜』を、義経が伝授したということは、義経の兵法が王権によって保証されたことを示すだろう。ここには、『平治物語』において、義経の兵法の背後に存在した《天狗》の兵法指南のエピソードが消滅している。鞍馬の僧正が谷の《天狗》は、『義経記』では『六韜』の影に隠れた。荒廃した貴船神社が「天狗の住家」となり、牛若が夜毎、貴船明神に源氏再興を祈り、清盛・重盛の首を見立て斬りつけるなど、個人レッスンはしているが、天狗の指南は特に語られていない(「牛若貴船詣の事」)。ここには、義経の強さを天狗から引き離そうという力が働いている。義経は《天狗小僧》であつてはいけないのだ。彼に求められたのは、飽くなき反逆の意思であり、「日々に多聞に入学して、謀反の事をぞ祈られける。」(同)

という多聞天(毘沙門天)への祈念・信仰であつた。

## 三、「大日の兵法」と『六韜』

『義経記』では、『六韜』を陰陽師法師鬼一法眼が賜つて秘蔵しているのを、鬼一法眼の娘(姫君)の協力で目に触れることが可能になる。父を裏切り、愛する男に宝を渡す。まさに、『妹の力』による。この構図は御伽草子「御曹司島渡り」と同一構造である。奥州藤原氏三代目秀衡によつて、「蝦夷が島」「喜見城」の「かねひら大王」のもとに、「大日の兵法」という祈禱の法・仏道の法を兼ね備えた兵法書が秘蔵されていて「この兵法を行ひ給ふものならば、日本国は、君の御ままになるべし」と、御曹司にそれを獲得し読むことが進められる。島に辿り着き、「かねひら大王」の娘「あさひ天女」の協力で、「大日の兵法」を手に入れ「三日三夜に書き写し給ふ」と自らのものにする。その結果が「かくて、兵法故、日本国を思ひのままに従へて、源氏の御代とならせ給ひけり。」という平家打倒・源氏の時代の到来であつた。それは、御曹司が『六韜』習得の場面で「昼は終日に書き給ふ。夜は夜もすがらこれを服し給ひ」(『義経鬼一法眼が所へ御出の事』)と異常なほどの集中力を見せ、その結果、「十六巻を一字も残さず、覚えさせ給ひて」(同)と、完全に覚えたことに対応する。御曹司が『六韜』を我が物にしたことが強調されている。《義経伝説》では、平家打倒のために、毘沙門天の庇護と、『六韜』兵法書の習得こそ、武将義経の強さの背景として存在しなければならなかつた。

## 四、神話の影

義経の背後に、仏法と王権の庇護を匂わせるために、彼は貴種

でなければならぬ。貴種の流離する宿命を指摘したのは、折口信夫である。義経は流離する。角川源義は「義経の上落といひ、渡鳥といひ、古代神話のにおいが濃厚である。」【1】という。我々は《義経伝説》に神話的世界を見る。角川は「古代神話のにおい」を「呪力を得るため遠く異郷を遍歴する若き英雄譚」【2】にみる。《義経伝説》における神話的世界は、それだけではない。少童神と巨人神との対面、飛翔する少童神と手こずる巨人神、降参する巨人神、そして「大己貴命と、少彦名命と、力を戮せ心を一にして、天下を経営（つく）る。」（『日本書紀』巻一、神代上）と、両者が協力して事業をなすという神話の場面。日本の国づくりを力尽くした二神の出会いの場面は、海上を渡ってきた少童神少彦名命を「大己貴命、即ち取りて掌中に置きて、翫びたまひしかば、跳りて其の頬を噛ふ。」（同）と飛翔する少童神と手こずる巨人神の構図を見せている。大小の二神が兄弟となつて、国づくりの事業を行つていくことと、「弁慶と二人して平家を狙ひ給ひける。」【弁慶】志又二つ無く身に添ひ、影のごとく、平家を三年に攻め落し給ひしにも度々の高名を極めぬ。】（『義経記』巻三「弁慶義経に君臣の契約申す事」と平家打倒という大事業を行ったことが神話的文脈では重なり合う。

## 五、一寸法師と牛若丸

『義経記』では、義経を平泉から一旦京都に戻らせるまでしても、弁慶と出会う場面が、どうしても必要だったのだ。義経と弁慶が歴史上の人物であることには、間違いないが、同時に伝説的な人物であり、その伝説は神話を色濃く反映した。中世の英雄伝説は新たな神話となつていった。室町期の物語の中で、飛翔する少童神と手こずる巨人神の構図を見せている物語がある。それは、

一寸法師と鬼との闘いの場面である。牛若丸と弁慶との闘いと類似性は、変幻自在な戦い方で鬼を悩ます一寸法師に、弁慶を翻弄する義経が重なる【3】。さらに、大と小の神が闘い、大の神が負けるという約束事が存在していた、と指摘するのは郡司正勝である。住吉明神の申し子一寸法師というところから、「住吉明神は、九州大分の古表神社や古要神社の神相撲では、色の黒いもつとも小さな神になつていて、大きな神を投げ飛ばすのが定まつている約束事であつた。」【4】といひ、このような「神相撲」という神事の展開が、「牛若」という小男が、大男の弁慶を降参させるという説話を構成した。【5】という。さらに、この約束の背景に、若宮・王子或いは童子信仰、さらに小子部の雷神信仰までが係わつているのではないかという郡司の指摘は、牛若と弁慶との闘いの神話的文脈の奥深さを際立たせる。おそらく、その指摘は正しい。

## 六、芸能としての闘い

『義経記』では、闘いは二度行われている。一度は五条天神で、二度目は清水観音の舞台である。前者では、特に観客はいないが、後者では参詣に来ていた人々が「引いつ進んづ討合ひける間、始は人も懼ちて寄りざりけるが、後には面白さに行進をする様に附きてめぐりこれを観る。」（『義経記』）と観客と化して、参詣者にとつて二人の闘いはほとんど芸能と化している。それも、御曹司の圧倒的な強さがあったればこそであつた。義経の余裕の態度は、闘いを「終夜、斯くて遊びたくあれども」と、《遊び》と感じていたという描写に現れている。浅見和彦は「ここには闘争を《悪》とし、危険行為と見なす視線はなくなつてゐる。弁慶という《悪》と、義経というその上を行く《悪》が白刃をまじえる活劇をもとめ、楽しんでゐるかのようである。それは、もはや見物

としての《悪》」であり、それは、「二条河原落首」の精神に極めて近いという【6】。中世、とりわけ南北朝から室町時代にかけての、民衆の感覚を伝えるものに、落首があった。「この比、都にはやる物。夜討、強盗、・・」(「二条河原落首」と危険な状態を、流行とする感覚、それは、「我等が面白キト思フ事二ハ、焼亡、辻風、小喧嘩、・・」(「秋夜長物語」と共通の感覚である。彼らの斬り合いが、芸能と捉えられた時代の感覚を知ることとは大事だ。そして、その時代、《悪》としての牛若丸(義経)も描かれていたことを忘れてはならない。

## 七、悪の牛若丸

『義経記』では、弁慶の「人の帯きたる太刀千振取りて、我が重宝にせばや」という願いが、義経との対決を引き起こした。弁慶は《悪》だが、義経は《善》ではない。ところが、五条大橋が対決の舞台となっている謡曲では、「牛若殿と申して御座候ふを、学問の為に鞍馬の寺へ御のぼせ御座候ふ所に。学問をばし給はで。夜な夜な五条の橋に出で。数多の人を御切り候。」(「笛の巻」)、「昨日五条の橋を通り候ふ所に。十二三ばかりなる幼き者。小太刀にて軌つて廻り候は。さながら蝶鳥の如くなる由申し候。」(「橋弁慶」)と牛若丸は狂ったように、五条大橋で人を斬っているのである。この理由を、大日如来と化した亡き父義朝の「まづ来年は十四なり。父が十三年の孝養に、五条の橋にて千人斬せよ。」(「天狗の内裏」という命を受けてと、孝養のためとしているものもあるが、謡曲の牛若丸は叛逆・狂気に身を任せた孤独な少年の様相を呈している。千人斬りの対象が平家一門とは書かれていないからだ。近世に入っても、そのような牛若丸は消滅することはなかった。島津久基でなくても「牛若の所業」とすると、義経ファンにと

って甚だ弁護に苦しむ悪行」「笑止愚劣な遊戯」【7】と言いたくなるような、《悪》の牛若丸の姿である。

## 八、義経を守護するもの

義経はどのような存在に護られてきたか。「いかにもして平家を滅ぼし、父の本望を達せむと思はれけるこそおそろしけれ。ひるは終日に学問を事とし、夜は終夜武芸を稽古せられたり。」(「平治物語」「牛若奥州下りの事」とただならぬ執念のもとに、彼は生きていた。その牛若丸の武芸(兵法)の指南をしたのが「僧正が谷にて、天狗と夜々兵法をならふと云々。されば早足・飛び越え、人間のわざとは覚えぬ。」(同)とあるように、天狗たちであった。また、世に騒乱を引き起こすことを、その存在理由とする天狗たちだけに護られていたのではなかった。「日々多聞(毘沙門天)に入室して、謀反の事をぞ祈られける。」(同)と毘沙門に謀反(平家打倒)を祈り続けていたのである。中世、毘沙門天は軍神として信仰された。叛逆の意思をもった武人へと突き進む荒ぶる王子・若宮としての牛若丸が存在してもなんら不思議ではないのである。そして、もう一人の荒ぶる王子・若宮としての牛若丸として登場したのが、弁慶であった。義経と弁慶との対の構造に目を向けたとき、「弁慶は牛若の異形変であり、その伝説も牛若伝説の異形変として形成されたというべきである。」【8】という指摘がある。「公達義経の鬼神化」【9】として登場したのが、『義経記』の弁慶伝説という視点である。義経を守護するものは、もう一人の義経だった。両者の「生まれ」「童の時代」「芸」「出発」「修行の地」を比較した五味文彦は「弁慶の物語とは、もう一つの義経の物語にほかならず」【10】と喝破、「弁慶との邂逅によって、義経はその生き方をも手に入れることになったのである。」【11】

と、義経はその分身として弁慶との出会いによって、戦いの場に躍り出ることが可能だったと示唆する。中世の英雄伝説は、出会うべくして出会う二人によって幕が切つて落とされた。

## 九、五条天神社の磁場

義経・弁慶の闘いにおいて、《五条天神》の神話的磁場が強く働いていることは指摘されてきた。少し長くなるが、例えば、近藤喜博の「五条天神の小人性はいきおい、鞍馬山に籠っていた牛若丸を小童に見立てて、この渡りで活躍させねばならぬ道具立てになつてくることも、長きにわたる五条渡の原始信仰にまつわる変形であり、説話化であつたとも考えられるようで、ここに屯した人々の心の裡に、或いは約束のようなものとなつていたのである。」【12】といった叙述である。五条天神の祭神、少彦名神と大己貴神が磁場の中核にある。五条天神社は、祇園社の末社で、医道の祖神少彦名神と大己貴神を祀り、厄病除災の神として信仰されていた。室町時代には、節分のときにここで頒たれる餅を食べると病気になるという風習があつた【13】。五条天神社は陰陽師との関係が深く、義経物語もこの天神社によって管理されていた【14】。義経をめぐる物語に、五条天神社と清水寺が深く関わっていた。牛若丸が小童であり、「はやわざ」を習得するというのも、少彦名神の飛翔性に淵源する約束なのである。少彦名神の飛翔性は、粟がらに弾き飛ばされて常世に帰還した神話も証明する。

## 十、女装する牛若

牛若丸の女装については、《五条の渡り》という地域の別の文脈

が働いていると考えられる。確かに、牛若丸は鞍馬山の稚児であつたが、女装と稚児姿は異なる。室町時代、《五条辺の立君》はよく知られた存在だつた。立君とは下級の遊女である。義経と弁慶との闘いの場は、『義経記』では、五条天神、清水寺であつた。二人の闘いの決着がつくのは、清水寺であり、当時、流布していたのは、「清水風情、牛若弁慶切合風情」(『看聞御記』)などから、清水寺の舞台での闘いだったことが推測できる。ただ、一方で、室町期、謡曲などでは、闘いの場が、五条の橋となつている。《五条の辺り》と《五条の渡り》が重層的な場を形成していたのだ。二人の闘いの場が五条の橋に収斂していった必然性を、濱中修は橋・童子・笛の境界性とみた【15】。中世、清水寺から、清水坂をまっすぐに下つていくと、五条坂下、そして五条の橋であつた(『洛中洛外図』)。その道筋は参詣人で賑わつた。橋は無縁のものであるはずだが、鎌倉時代から清水寺が五条橋を渡る参詣人から、橋銭を徴収していたという。さらに、清水坂には清水寺に隷属した「坂者」という非人集団が居住していたという。《五条辺の立君》も清水寺と深い関係にあり、彼らから収入の一部を徴収して、同時に保護を加えていたのではないかと推測されている【16】。夜の五条の橋を渡ってくる女装の者という設定に、下級遊女の姿が投影されている。義経伝説の中の御曹司義経のもつ《異端性》については、彼の持つ《芸能性》とともに、さらに考えていく必要があるが、その《芸能性》は前述したように、武芸という闘いの芸として突出していた。

## 十一、笛による出会い

義経の《芸能性》は、御伽草子「浄瑠璃十二段草子」に描かれてるように、笛の力、まさに遊芸の力で恋を獲得していく場面

に顯著である。そして、義経と弁慶の出会いの契機も笛の音であった。五条天神の場面の「暁方になりて、堀河を下りに行きければ、面白く笛の音こそ聞えけれ。弁慶これを聞きて、面白や、さ夜更けて天神へ参る人の笛か、法師やらん男やらん、よからむ太刀を持ちたらば、取らんと思ひて、笛の音の近づきければ、差屈みて見れば、未だ若人のしろき直垂に胸板をしろくしたる腹巻に、黄金造りの太刀のころも及ばぬを帯かれたり。」〔義経記〕「弁慶洛中にて人の太刀を奪ひ取る事」のごとくである。謡曲「笛の巻」では、牛若の持つ笛の由来が、母である常盤から語られる。笛を包む錦に虫喰いによって現れた文字には、その笛が「壹萬五千。三百餘歳経て。弘法大師の御手に渡りその後。義朝の末の子牛若が手に渡るべし」とあったと語られる。この後、場面は謡曲「橋弁慶」に続き、牛若丸は五条の橋に向かい弁慶と遭遇する。稚児のような牛若丸が弁慶の前に笛の音とともに現れるのである。そして、太刀奪取をめぐる闘い。その闘いは、二人にとつて至福の時のように描かれている。だから、再会の場面も「弁慶」〔あら面白の笛の音や、あれをこそ待ちつれ。〕〔弁慶義経に君臣の契約申す事〕と、清水坂の辺に「例の笛」が聞えてくることを心ときめかせて待つ弁慶の姿を浮かび上がる。弁慶の前に笛の音が聞こえ、逢瀬のような闘いが始まる。そして、主従の誓い。牛若丸、遮那王、御曹司源義経とその姿を変容させながらも、義経と笛との組み合わせは変わらない。

## 十二、稚児と笛

童子は飛翔し、笛を吹く。中世物語において、《笛吹き童子》のイマージュが室町人を虜にした、という方が正確であろう。稚児物語では稚児の悲劇を際立たせる笛の音が響く。牛若は鞍馬寺の

稚児であるが、武士の血に導かれ、反逆者の道を辿っていった。それにしても、御曹司の物語には、稚児物語の悲劇性が漂っている。それは、愛と供犠の対象としての稚児の宿命を感じさせる。稚児は、人と神との、さらに男と女との境界に存在する周縁的、境界的存在。そして、濱中修によれば、稚児物語を通して、笛は稚児の最も近い楽器であったという〔17〕。弁慶の前に現れた御曹司は「薄化粧、鉄漿黒く」〔弁慶物語〕と稚児そのものである。そして、笛が稚児に近い楽器であることは、笛そのものの特質にもよる。中川聡によれば、古来、笛の音は神の声であり、笛は神おろしの楽器として考えられていた、古代・中世説話集には、笛を吹くことで神が示現した話、奇跡が起った話、さらに神通力を持つ笛の話などが収載されているという〔18〕。《笛吹き童子》は神に通じた存在、垂迹した神という室町人の信仰ゆえに、笛を吹きながら現れる御曹司は、童子神であった。

## 十三、毘沙門天の護法

義経は鞍馬寺の守護神「毘沙門の御再誕の若君」〔天狗の内裏〕であった。義経伝説を管理した社寺として、先に五条天神社と清水寺をあげたが、当然とは言え、鞍馬寺の毘沙門天信仰にも、目を向けるべきだろう。義経は毘沙門天の再誕といわれている鞍馬寺の稚児なのだ。義経の飛翔性を考える要素として《護法童子》の姿が浮上してくる。義経は毘沙門天の再誕といわれながらも、小童なのである。毘沙門天には付き従う二人の護法童子がいる〔今昔物語集〕巻12「書写山の性空聖人の語」第34。毘沙門天の荒魂と和魂のような乙童と若童という名の護法童子。そこに、義経と弁慶を投影することも可能だ。毘沙門天の護法童子で、その天空を飛翔する姿を印象づけたのは「剣の護法（劍鎧童子）」

である（「信貴山縁起」）。故に、近藤喜博の「あの小童的な牛若丸の出現にして、彼の燕の如き飛翔の姿の底には、護法に通ずるものがあると思つてゐるのだが、どうであらうか。」【19】という問いかけに対しては、わたしとしては《諾》と答えたい。義経と弁慶の物語は、室町期の毘沙門天とその眷属の物語でもあったのだ。

#### 十四、雷神小童

郡司正勝は、牛若丸が五条橋を笛を吹きながら通る姿に着目した。「牛若丸は、小人であり、稚児であり、小男であったというところに、笛はつながる。」【20】。古代へのまなざしは、「笛は、古来、小部氏の職掌であった。」【21】と《小（子）部と笛》の關係にまで向けられる。中世、田楽の笛を吹く田楽法師一座の童子たち、獅子舞の笛を吹く「小部」の童子たちが投影される牛若丸。「都一の管絃者」（『浄瑠璃十二段草紙』）と称された御曹司義経。現在、鬨の場は、五条の橋（『弁慶物語』）とされているが、かつて五条天神社の境内、清水寺坂（『義経記』）でも彼らは鬨った。牛若も弁慶も五条天神を信仰していた。郡司氏は、牛若の《女装》は稚児牛若を際立たせていると同時に、傾城姿をも意味したという。五条天神社のある五条西洞院は、古くから傾城町であったからだ。五条天神の祭神少彦名神による牛若の小童の約束など、郡司氏の指摘は興味深い。「五条天神社のある五条橋は、妖しき幼童の出現する素地があり、笛の音がまつわるのだといつていい。」【22】と、弁慶を屈服させる牛若丸に、雷神を屈服させた小部スガルの面影を見出す。遙か、古代から中世への神話的水脈が見える。先に、義経に毘沙門天の《護法童子》の姿を見たといつたが、異界の子どもの淵源に《雷神小童》を見る。平安時代の仏

教説話のなかで、《雷神小童》が《護法童子》化を示していった。『法華経』の力に屈服した《雷神小童》は、神融法師のために、岩を穿ち水を湧き出させた（『大日本国法華経験記』巻下「第八十 越後国の神融法師」）。

#### 十五、芸能神の加護と死

御伽草子『御曹子島渡』のなかで、幾多の危機を、笛を吹くことで脱していく御曹司義経。柳田國男は、その話の由来は知ることができないとしながらも、『浄瑠璃十二段草紙』に典型的に描かれているように、浄瑠璃御前の心を掴むのも笛によることから「笛の曲に精妙であった若者が、かかる超凡の婚姻に成功しうるものごとく、以前想像せられていた時代があったように思われる。」【23】と述べ、「この問題の奥行きは際限もなく深い。」【24】と示唆した。笛の力は目的を達する力。「日本国を思ひのままに従へて、源氏の御代」とする夢を可能にするのが、「現世では祈禱の法、後世にては仏道の法」、さらに兵法でもある「大日の法」を記した巻物を手に入れることであった。大王の娘、「朝日天女」の心をもつかみ、「超凡の婚姻」によって巻物を獲得。そのことで、平家打倒は果たされる。天女の死を代償に、御曹司の夢を可能にした笛の力。その天女は「日本相模国江ノ島の弁才天の化身」であり、「義経をあはれみ、源氏の御代になさんため、鬼の娘に生れさせ給ひ、兵法伝へんため、かやうの方便ありとかや。」（『御曹子島渡』）と、その死は芸能（管絃）の守護神の「方便」として語られた。弁才天の死を代償にして、御曹司の夢が果たされたのである。いま、「この問題の奥行きは際限もなく深い」予感に襲われている。弁才天は聖なる河が神格化された女神（＝水神）である。毘沙門と弁才天は、中世、七福神として名を連ね、彼らのもとに《護法

『童子』がいる。神話上の《芸能神義経の母》の問題に入る予感に襲われているが、いまは、「この問題の奥行きは際限もなく深い」という予感に襲われつつ、筆を擱く。

注

- 【1】 角川源義『源義経』講談社学術文庫、二〇〇五年、八二頁。
- 【2】 同。
- 【3】 浅見和彦「都市人の夢と遊楽―『義経記』と『一寸法師』―」『國文学 解釈と教材の研究』第三九卷一号、特集：お伽草子文学と絵と物語と。学燈社、一九九四年、四六頁。
- 【4】 郡司正勝「笛吹き童子」『童子考』白水社、一九八四年、四六頁。
- 【5】 同。
- 【6】 浅見和彦、前掲論文、六〇頁。
- 【7】 島津久基『義経伝説と文学』明治書院、一九三五年、三二―三頁。
- 【8】 高橋富夫『義経伝説―歴史の虚実―』中公新書、一九六六年、一四二頁。
- 【9】 同、一四三頁。
- 【10】 五味文彦『源義経』岩波新書、二〇〇四年、五三頁。
- 【11】 同。
- 【12】 近藤喜博『日本の鬼―日本文化探求の視覚―』桜楓社、一九七五年、一九七頁。
- 【13】 五味文彦、前掲書、五五頁。
- 【14】 角川源義、前掲書、五七頁。
- 【15】 濱中修「童子の風景―笛・境界・漂白―」『室町物語論攷』

新典社、一九九六年。

- 【16】 後藤紀彦「立君・辻子君―室町時代・京洛の遊女たち―」週刊朝日百科3『日本の歴史 中世Ⅰ-③遊女・傀儡・白拍子』。

- 【17】 濱中修「童子の風景―笛・境界・漂白―」。
- 【18】 「笛」『日本奇談逸話伝説大事典』勉誠社、一九九四年。
- 【19】 近藤喜博、前掲書、二〇五頁。
- 【20】 郡司正勝、前掲書、四二頁。
- 【21】 同、四三頁。
- 【22】 同、四七頁。
- 【23】 柳田國男「山路の笛」『桃太郎の誕生』角川文庫、二九三頁。
- 【24】 同。